「彼女自身の言葉で　香港独立系映画作家セシル・シュ・シェン（唐書璇）の旅路」
2014年夏、ゲール・リテラチャー・リソース・センターでのセシル・シュ・シェンの発言

アリス・シー

セシル・シュ・シェン（唐書璇 *訳者注 本文ではこの漢字名を使用　また、彼女はセシル・タンと表示される場合も多い）は、中国映画愛好家の間でもあまり馴染みのないシネアストかもしれないが、香港インディペンデント映画界のシネアストとして世界的に初めて評価を受け、映画賞の獲得の経歴を持つ人物である。当時、香港の映画業界が邵氏兄弟有限公司（ショウ・ブラザース）のような男性中心の制作環境にあって、唐書璇は女性として特異な存在だった。主要な映画撮影所で制作される作品はほとんどが商業映画であり、唐書璇の制作する作品のような興行収益の望めない作品、もしくは興行的な成功を収めたことのない実績のない映画監督には資金調達はほぼ不可能な状況にあった。当時、香港には映画制作のための政府系ファンドの制度もなく、利潤追求のためではなく純粋に映画制作への強い気持ちを満たすためには、インディペンデンス系としては映画産業以外から資金を調達するしかなかった。こうした環境の中で、唐書璇のデヴュー作となった「董夫人（THE ARCH）」（1970）は彼女自身で資金を調達し、限られた予算の中で香港で制作された作品だった。1971年、この作品は金馬奨（ゴールデンホース。アワード）の最優秀主演女優賞（リサ・ルー：蘆燕）、最優秀撮影賞、最優秀芸術功績賞そして最優秀芸術作品として創造的イノベーションを讃える特別七月賞を唐書璇自らも受賞し四部門を独占した。四年後の1974年「再見中国（BEHIND CHINA）」を制作、唐書璇はこの作品で文化大革命後の中国本土の人々の生活の実態と四人組による政治の問題点を鋭く衝いた。映画評論家は「董夫人」と「再見中国」の二作品を中国映画の史上ベスト100の中に常にランクインしている。三作目は喜劇「十三不塔」（1975），そして最後の作品「暴發戸」（1979）で、この作品では急速な工業化を遂げる香港の光と影を描いている。

唐書璇は1941年生まれ、雲南、香港いずれで生まれたかははっきりしないが雲南省の出身であることに間違いないようだ。（訳者注　祖籍は雲南という表現になる）彼女の経歴には謎めいた部分があり、それは彼女の祖父がかなりの権力を誇った地方軍閥の中心人物であったことと関係しているようである。家柄や家系については触れられたくないようで、自分の名前を名乗るときでも本来の姓である「唐」を省いて「書璇」と言うことが多い。香港で幼少期を過ごし、十六歳のときに家族と一緒に台湾へ移住した。彼女の家庭は極めて裕福であり、政治的にはリベラルで、映画を勉強するために彼女がアメリカ留学をすることにも十分な理解を示し、十九歳でUSC（UCLA）に留学した。これは、2013年トロント・インターナショナル・フィルム・フェスティバルにおける「中国映画の100年」を開催した際に、唐書璇をゲストして招いたときの彼女の発言の記録である。

（訳者注：推測の域を出ないが、唐書璇の祖父は唐継堯（1883〜1927）ではないかと思われる。唐継堯は1907年日本の陸軍士官学校を卒業後、辛亥革命に参加。滇軍（テングン）と呼ばれる雲南軍（雲南派）の創

始者であり、中華民国初代貴州都督（軍政府長官）として中華民国初期の十数年間に渡り雲南省を統治した人物）

「私は自分のことをプロの映画作家だとは思っていません。私によって映画は、内面的な何らかの回答を得るためのもので外部へそれを伝える媒介の役目を果たすようなものです、自分自身の精神分析をするような- - - -。私たちは若い頃、自分自身の持っているポテンシャルがどんなものかと躍起になっていました。今になって考えれば、私はイマジネーションの頂点に達したとは思えません。私が香港で最初のインディペンデント系の監督だったとか、国際的に初めて認められた女性監督だったとか考えたこともありません。私が追求したのは問題の真相を知ることで、物語を伝える媒介として、もしくは一つのチャンネルとして映画というものを考えています」

「董夫人」（「THE ARCH」）（1970）

1960年代後半、UCLAを卒業した唐書璇は香港に戻り、最初の長編作品となる「董夫人」の制作に取り掛かった。この作品の舞台は17世紀の明朝後期、主人公の董夫人は居住する村の名家の未亡人で、村への貢献が認められ皇帝の命により記念碑の建立が進められることになる。記念碑（THE ARCH）が建立されることは中国では最大の栄誉の一つとされる。こうした中、若い将校がこの村に派遣されることになり、彼女の屋敷に寄宿することになる。彼女はこの将校に恋愛感情を抱くが、彼女の娘も彼に好意を寄せ、夫人は因襲的な道徳意識の持主であるがゆえに懊悩することになる。董夫人を演じた盧燕（リサ・ルー）（1927～　）は香港生まれの女優で、1958年以降はアメリカの映画・TV界を活動の場としていた。この作品は、これまでの中国映画に見られなかった女性の精神構造を見事に描写し、クリエイティブなイノベーションを果たした作品として金馬奨の特別賞を受けている。

「香港に戻った当初は、映画業界に誰も知り合いはいませんでした。そこで、紹介されたのが俳優で映画監督のパトリック・ゴン・ラン（龍剛　1934～2014）で、唯一の香港映画界との繋がりでした。彼のお陰でキャセイ・スタジオを借りることができました。制作はあくまでも低予算で行わなければなりません。録音スタジオとして使ったのは、長い間使われていない何階も階段を昇って行かなくてはいけない本当に狭い部屋でした。モノクロで撮影したのは、私がモノクロ画面が好きだったというのもありましたが、低予算のせいでもあります。その後のことになりますが、1970年代になると香港にはモノクロフルムの在庫自体がなくなってしまい、モノクロで表現したいと思ったときには、カラーフィルター（tint-filter）それに彩色処理（hand-tinted）の手法を考案しました。香港で商業映画を撮ったときにこの手法を使ってます。フィルターの使用で古い中国の絵画の色調を再現することが可能なのです。皆さんも御存知のようなライトグリーンがかったセピア調のもので、この作品のコピーが今となっては無くなってしまったことは残念です。今にして思えば、もう一度この作品を撮るとすれば音楽をもっと控え目に使うでしょう。かなりのシーンで音楽を使い過ぎて、くどく感じてしまいます・・・香港フィルム・アーカイブに現存するフィルムで見て、そう感じたのです。音楽をやり直したいと」

1960年代にUCLAに学んだ唐書璇には、何人かの後に有名なシネアストとなる人物がいたが、アメリカ人映画監督ジェームズ・アイヴォリー（1928～　）もその一人だ。アイヴォリーは彼女に、1950年代、1960年代にサタジット・レイの下で撮影を担当したインド人カメラマン、シュブラット・ミットロを紹介した。ミッ

トロはアイヴォリーの1960年代の作品にも参加している。また、映画作家で編集でも著名なレス・ブラウンはUCLA時代の彼女のクラスメートだった。ミットロはカメラマンとして、ブランクは編集担当として「董夫人」に参加した。唐書璇はアメリカで映画を学んできたが、「董夫人」ではハリウッド流の制作スタイルを用いることはなかった。

「この作品の題材は実際に非常に映画向きだと思いました。でも、シナリオを書き上げた時点で、UCLAの担当教官に読んでもらうと、『映画向きじゃないね、内面的なものは簡単には表現できないし、これは女性の葛藤を表したものだろう。それにプロットとして特徴的なものが不足している』と指摘されました。私としては、これほど映画的なものはないと確信していました。UCLAの考え方は私の考え方とは違っていたし、端的に言えばハリウッド的ではないということだったのかもしれません。私は主人公の内面的な苦悩をヨーロッパ的な映画技法を用いて表現しなければと考えました。当時、ニューヨークタイムスの映画批評欄を読んで外国映画をもっと見る必要があることを痛感しました。私を含め中国系の人間にはそうした機会に恵まれなかったのでものですから。編集を担当してくれたレス・ブランクは静止画（freeze-frame）の使用で効果を上げる提案を受けました。彼とは編集に当たっては随分議論を重ねましたが、信頼の置ける人物として感謝しなければなりません・・・ 例えば、結婚式のシーンで花嫁がカゴに乗って儀式に臨むところがあるのですが、彼はそのシーンをカットしたかったのです。彼にとっては、この中国の慣習が非人道的に映ったのです。何か他の方法があるだろうと・・・私は断固ノーでした。それが当たり前のことだったからです。結局彼も納得し、このシーンは残したのです」

「再見中国（サイチェン チュウゴク）」（「CHINA BEHIND」）（1974）

「一作目の『董夫人』を撮って四年後に二作目になる『再見中国』を構想し制作にかかりました。その動機になったのは、新中国建設への寄与・貢献をどういう形で表現しようかという強い気持ちでした。でも、一般の人たちは、それを避けようとします。この歳にならなければ、当時の中国の若者たちが生命を落とすかもしれない危険を冒してまで、本土から香港へ渡ってくることが理解できないかもしれません。文化大革命が始まった当初、世界全体が本当に昂揚感で包まれたのです。興奮がまるで全世界に広がったようでした。当時アメリカではヒッピーに代表されるフラワーゼネレーションの時代だったし、フランスでも若者を中心とした再評価と改革の時代でした。文化大革命の当初、学生たちはみんな興奮の渦に巻き込まれ、すべてのこと ・・・特に国家の行末に大きな関心を寄せていました。私もその仲間に入って、新国家建設のために貢献したかった。そして、何よりも中国へ行ってみたかったのです。ところが、周りの状況を見ると、誰もが生命を賭けるリスクまで冒して本土から国外に出ようとしているのです。これには私も当惑しました。そこで、ストーリーを考え、映画の制作に取り掛かったのです。それは、この状況を私自身しっかり理解するためでもありました。本土から香港へやって来た多くの難民の人たちから話を聞き、できる限りのリサーチを重ねました。香港では文化大革命についてリサーチする上で何ら制限はありません。リーサーチを重ねていく中で私が見たのは、香港へ脱出できたものの思ったようには行かない苦悩する人々の姿でした。そして、そこからストーリーを組み立てました。幾人かの登場人物の設定を考え、薄暗いアパートメントの中で造花を作る人物、教会通いに余念のない人物、証券取引所で働くうちにオポチュニストになってしまった人物などでした。そこには、何というコンコトラストがあることでしょう。証券取引所の撮影は実に困難を極めました。そこで頼りになったのは、私の友人の俳

優で映画監督でもあるパトリック・ゴン・ラン（龍剛）で、彼は株式のブローカーでもあったのです。撮影チームを証券取引所に入れてしまうと、彼はブローカーの免許を失うリスクもあったのですが、幸運なことに私たちが撮影しているのに誰も気が付きませんでした」

「『董夫人』と『再見中国』の作品スタイルに大きな違いはありません。映画を学ぶ学生として、私は決して優等生ではありませんでしたし、監督の勉強はしていません。ただ、考えていたのはコンテンツが撮影手法を決定するということです。扱う題材が社会的、政治的であればドキュメンタリータッチで撮ろうとしたのです。そのため、この作品ではドキュメンタリーのカメラマンを起用しました。俳優も当時TVで演技経験のあった女優一人を除けば他の全員はアマチュアでした」

「この作品を台湾で撮影したのは、香港で撮影しても中国のようには見えないからです。マカオでも中国のようには見えません。制作は困難を極めました。スタッフは別の作品の撮影が完了するまで来てくれないし、撮影機材を借りるために走り回らなくてはなりませんでした。嘘のような話ですが、大変な低予算作品です。アダプターさえありませんし、レンズを保管するケースさえなく大事に手持ちしていました。フィルムの購入にも事欠きました。その上、撮影はまるで地下活動のようで、実験的であり、プロらしさの微塵もありませんでした。幸いなことに、台湾側は私が何をしているのか知りませんでした。知っていれば、逮捕されたことでしょう。これは反共映画だと説明し、精神的な支援は受けましたが、金銭的な支援はまったくありません。撮ったフィルムは編集のためにこっそりと香港へ持ち帰らなければなりません。そのときはビーフジャーキーの箱の間に忍ばせて持ち帰りました。兵士役の出演者には、人民解放軍の軍服を着せなければなりませんが、台湾ではそうした行為が禁じられていたので厄介なことでした。ロケ現場の確保やエキストラ集めも大変でした。冒頭のシーンに出てくる大学のキャンパスは、実は高校のキャンパスです。学生たちに呼びかけ集まってもらい、紅衛兵の役をやらせるのですが・・・ 彼らはこれまで革命歌の一つも聞いたことがなかったのです。また、当時の台湾は検閲制度が厳しく、学生たちは毛沢東の肖像さえ見たことがなかったのです。ですから、毛沢東の肖像も毛沢東語録も・・・何もかもこっそり持ち込むしかありませんでした。当時、台湾では共産党の統治する地域を『無法地帯』と呼んでいました。キャンパス内での撮影が許可されたときにも、化学研究室の撮影には難色を示すのです。『無法地帯』には、こんな立派な施設はないという理由でした。この作品はすべてこの作品用に撮影したもので、資料フィルムは一切使っていません。当時、香港には組織化された共産主義者が地下活動を行っていました。撮影後に『香港総督』の名で私は召喚され審問を受けることになりました。そのとき、総督は『この作品が本土で撮影されていないことが、すぐに分かったよ。それは撮影ミスではないのか。本土では街路樹はすべて下の部分を白くペンキを塗ることになっているが、この作品に出てくる街路樹は白くないからね』と言うのでした。この作品を制作した意図は何かとも訊かれましたし、『誰が資金提供したのか』とも『君のバックに付いているのは誰なんだ』とも。『我々が知る限りでは、台湾がバックに付いているとも思えないし・・・当然香港でも中国でもないし、ましてロシアでもないだろう』と訝しげにしていました。この作品は、私のイマジネーションとリサーチから生まれ、私自身の資金で制作したものです」

「私がこの作品を台湾で撮ったもう一つ別の理由があって、それは『董夫人』の撮影のときのことですが、実際に一人の専属のクルーもいなくて何から何まで私一人でやらざるを得なかったのです。『董夫人』の公開の後、私と一緒に働きたいという若者や学生たちが台湾にいたのです。その中には、後に映画監督になった張翰（1983〜 ）、『アジア・ウィークリー』の編集長のChu Li Ben、映画監督・映画研究者の卓伯棠たちがいました。彼らは当時まだ学生で、一緒に働

いてくれた仲間でした・・・ ようやく私にもチームが出来上がったのです」

『再見中国』は、唐書璇と彼女の協力者たちに映画づくりへの愛の重要性を認識させたと言える。彼女が大きなプレッシャーを感じながら、また右派、左派両派からの批判を浴びながら、この作品を完成させたのは奇跡的なことだった。よほど高い報酬がなければ、これほどのリスク度の高い仕事を引き受ける監督はいないだろう。作品は香港での検閲をパスし公開されたが、香港政庁は中国をリアリスティクに描いたこの作品が共産主義国家中国との緊張を高めることを恐れて、三日間で上映を中止する措置に出た。作品はその後1978年にフランスで公開されたが、また上映が禁止され再上映されたのは十三年後のことだった。だが、既に文化大革命は過去のものとなり、また当時の苦痛を頭から消し去りたいという気持ちが人々の間に強かったため共感を得ることはなかった。

「十三不塔」（「SUP SAP BUP DAP」（広東語）「SHI SAN BU DA」（北京語）」（1975）

「『再見中国』の後に五年間で二本の作品を撮りました。三本目が『十三不塔』です。これまでの二本の作品のようにはしたくなかったので、まったく作風の異なるものです。当時の香港の状況を表現したいと考え、十三のストーリーを作ってみたのです。（今では十一のストーリーしか残っていませんが）香港の人たちの間で流行している麻雀やギャンブルを描いてみました」

「十三不塔」は唐書璇にとって初のTV,映画界のスター俳優を起用してのコマーシャルベースの作品だ。麻雀をテーマにした断片的な個々人のストーリーであり、TV番組的な小品といった印象に出来上がっている。また、不条理コメディ、ロマンティック・コメディ、ソフト・ポルノ、ファンタジー、スリラードラマといった様々な要素がこの作品の中に散見できる。だが、コメディ的な要素が強い中で、貧困、孤独、死といった暗いテーマが扱われている。その一例として挙げられるのは、自殺願望のある間借人の登場だ。女家主は何とか彼を救おうとするが、家賃を滞納しているのを知るとそれを止めてしまうのだ。彼女は金を搾り取り、彼を死へと追い込んでしまう。残念なことにこの作品は興行的に失敗作となってしまう。

「暴發戸」（「THE BOSS」「HONG KONG TYCOON」）（1979）

香港を舞台にした不条理で社会的主張をテーマとした風刺ドラマ「暴發戸」は、どういう訳か社会的階層の低い人物が、何かしら疑惑に満ちた手段でリッチな身の上となり、やがては大富豪へのし上がるストーリーだ。労働階級の主人公が、リッチな女性との結婚を果たし、彼は彼女を利用して社会階層を次第に昇って行くが、嫌がる他の女性を口説き落とし、新たに富を得て相当の社会的地位を築いてしまう。この種の作品では、当時は（男性監督が撮ったものでは）男性の猛アタックに屈した女性は悲劇的な結末を迎えるのが通常パターンだったが、この作品はそのパターンには当てはまらない。唐書璇は自身をフェミニストではないと考えるが、ここで描かれる女性の世界はまさに通常ではないことが明白だ。この作品は

彼女のオリジナル脚本ではなく、共作した唯一の作品だ。彼女は登場人物のキャラクターを説得力あるものに練り上げ、商業映画しかもB級作品に芸術性を具えたハイブリッド作品に仕上げた。

「この作品は、私のオリジナル作品ではありません。ストーリーの粗筋だけ書かれたものを一頁だけ渡され、そこからそれに沿ってセリフを作り上げていくといった進め方をしました」

「撮影にかかると最悪な状態でした。完成した作品を私はまだ見ていません」

唐書璇は詳しくは語らなかったが、プロデューサーとの間に何らかのトラブルがあったことが窺える。彼女に最終的な編集権が与えられていなかったことがトラブルの原因とも考えられる。

唐書璇は、旺盛なインディペンデント系映画制作の精神の持主であり、1980年代の香港の若手映画監督にとっては、香港映画の先駆者であり、そのインスピレーションは彼らに引き継がれたと言えよう。張叔平（ウィリアム・チャン）は美術監督、衣装デザイナー、編集担当として王家衛（ウォン・カーウァイ）の作品に参加してきたが、彼は「十三不塔」「暴發戸」の助監督として付いた経験を持っている。実際に彼女は香港新浪潮（香港ニューウェーヴ）のシネアストの範囲を超えて強い影響を与えた。「十三不塔」「暴發戸」に見られる不条理コメディは、周星馳（スティーヴン・チョウ：チャウ・シンチー）の「無厘頭」と呼ばれるナンセンスコメディ二本に強い影響を与えたことが見て取れる。1980年代初期にチャウ・シンチーが香港のTV界にいた頃、彼は唐書璇に指導を受けていたことがあり、これはその結果だとも言える。

「結婚していた時期もありましたが離婚し、前の夫はロス・アンジェルスへ旅立ちました。そんなこともあって1979年に映画界から身を引こうと考えました。でも「BEIJING ENCOUNTER」というタイトルのTV用映画作品に関係しましたが、この作品に私の名前はクレジットされていません。これは、北京を訪れたアメリカ人の旅行者のグループを撮ったもので、ワシントンでは公式な大規模なイベントまで開催されたようです。というのも、これは初の米中共同制作だったからです。私は招待を受けていませんでした。この作品では脚本を担当し、反応が非常に気にかかっていました。当時の状況からすれば、時代に相応しい内容だったと確信しています。確か、1981年か1982年のことだったと思いますが、プロデューサーはニューヨークの人物でした。彼は米中共同制作を担当する初のアメリカ人になりたかったのです。ある日のこと、粗筋を受け取ったのですが、監督する気はまったくありませんでした。ハリウッド俳優が出演する作品は撮りたくなかったのです、ですから私が関与するのであればプロデューサーか脚本だと思いました。ご存知のように私は大変な怠け者で・・・ そこで、『この作品のテーマをきちんと理解できる監督を探すことが大切ですね』とプロデューサーに言ったのです。すると彼は『大丈夫、もう見つけているよ、中国に来たことがあるし、興味を示している』とのことでした。その後、その人物と一緒に北京に行ったときには、私は本当にがっかりしてしまいました。中国通であるはずの彼は、毛沢東の毛の字の発音さえできなのですから。『ロケ現場へ行きましょう』と誘っても、彼は飲んでばかりで何もしません。そんな状況で、セットに最初の何日間かは入りましたが、辞めることにすたんです。私としては・・・ いざ撮影に入れば、それに携わる人たちと信頼関係を築いていくことが肝心なのです、判るでしょう。おそらくプロデューサーは私を監督として使いたかったのでしょうが、その頃私には三本の企画がありました。でも、もうこれ以上は撮りたいとは思っていませんでした ---

『BEIJIN ENCOUNTER』に出演したジョアン・チェン（陳冲）は、ワシントンでのイベントに出席するので私にも一緒に行くように誘われましたが、『どうでもいいことよ、だって私は招待されていないんですもの』って言っておきました」

「その後、何本かのオファーはありました。その中で白先勇（BAI XIAN YONG 1937〜 台湾の著名な作家・脚本家）との共作の形で作業したことがありましたが、母が病気だったこともあり続けることはありませんでした。母とは離れたくなかったのです。彼は制作の資金調達を済ませ、撮影寸前ということもあり私に怒り狂ったほどでした。ロケ地の南京までの航空地チケットまで送ってくれましたが、行くことはできませんでした。また、監督の謝晋（XIE JIN 1923〜2008 中国第三世代映画監督　代表作「芙蓉鎮」）からも脚本の依頼がありましたが、これも断りました」

それ以降、唐書璇が映画制作に係ることはなかった。彼女は生活の拠点をロス・アンジェルスへ移し、高級レストランを経営した。

「私のことをご存知であれば、私は同じことを二度はやらないことは判るでしょう。『再見中国』は『董夫人』とはまったく違う作品だし、『十三不塔』だって『再見中国』とも違うし、『暴發戸』と『BEIJING ENCOUNTER』とは違います。今やっていることだけに興味があって、以前のことにはもう興味が持てないのです。母が亡くなると、レストランを処分してしまいました。もう引退の歳です。今はミュージカルを書くことに時間を充てています。文化大革命については随分リサーチを重ねたことがありましたが、この物語の主人公は毛沢東夫人だった江青です。今も書いている途中なんです。

この機会は、トロント・インターナショナル。フィルム・フェスティバル、ノワ・コーン氏、そしてまた香港フィルム・アーカイブのご厚意なくしては実現できないことでした。改めてお礼申し上げます。」

原文：「In her own words: the Journey of Cecile Shu Shuen Tang, Hong Kong independent filmmaker」Gale Literature Resource Centre Author Alice Shih 2014 from: Cine Action (ISSE 94）